

# “教師”にこだわった 大学人

秋葉 英則

筆者は今年で44年間「大学人」として生きてきた。その間、常におもい煩ってきた生活感（観）は教師として生きるか、それとも研究者として生きるかという問いでした。この問いは、大学のありようそのものを問う命題と重なります。

わが国の大学は、わが国の近代化の歩みの中で発展し今日に至っているのですが、大日本帝国を夢みた先人は帝国大学のありようを問い続け「末は博士か…」という似非ロマンを鼓舞し誤った子ども観を流布し続けました。この過ちに気づいた先人の多くは師弟愛に学び真理探究のヒューマンズムを問い続けてきました。その多くの学び舎が専門学校ルーツでもあります。今、わが国の大学はわが国の近代化の歴史にあってそのルーツがどのようなところにあったのか考えあわねばならないと痛感しています。専門学校から大学への歴史的発展に学ぶのか、それとも、そのルーツを意図的に否定して帝国大学をその源にすえようとするのか、個々の大学人に問われているのです。とりわけ、福祉関係の科学と福祉職養成にかかわっては、今や国民のための健康科学創造にかかわってこの問いかけは緊急を要するものといっても過言ではないでしょう。

筆者は前者の道を選択します。

よりわかりやすい問いかけをするならば、医師要請が専門学校から発したことの重みに気づくべきだと主張したいのです。これを文教政策とりわけ高等教育をめぐる状況から点検するならば、大学の設置基準の大綱化がすすむ中で大学は“教育と研究の砦”であることを認めつつ個々の大学人がその軸足を知の世界に置きつつ訓育と陶冶の精神をおろそかにするようであったならひとりの大学人の生涯の生きがい spoils されてしまうのではないかとうれいているのです。

この視点こそ“教師”にこだわった大学人か学者と呼ぶ大学人像なのか、なのです。この視点は筆者の44年間の大学人としてのこれまで、これからをもって検証できるといいきたいのです。

筆者が学長として小坂教授を名誉教授に推挙したいと教授会に提案したい理由はここにあったのです。

小坂教授の定年後、教え子の諸君が100名余集うとともに学び舎をあとにする淋しさを語り合ったとのニュースを耳にしたとき教え子の名前があれだけ次から次へと語れる先生ってめずらしいなあと思懐したものでした。

筆者と小坂教授との出会い、語らいの間は短いものでしたが、筆者に小坂教授の教師像を刷り込ませた要因は次の三要件にあるといつて過言ではない。

- ①母であり続けることへの哲学の希求が小坂教授のヒューマンズムの元型を形づくっています。
- ②福祉職としてのプロへのつきることのないこだわり

小坂名誉教授は最近の筆者への私信（③）でこれらを次のように伝えてくれました。さらなるご活躍を祈念しています。

今回の論文は、現在全国で9カ所開設されている聴覚障害者の老人ホームについてまとめてみようかと考えています。以前から気になっていたテーマの一つです。本学の実習施設である「あすくの里」（羽曳野市）も聴覚障害者の老人ホームのひとつです。

聴覚や視覚障害者の聾学校や盲学校は比較的早くから取り組まれましたが、重複した障害の方は永い間教育から排除されてきました。1979年に養護学校の義務教育化が始まりましたが、重複障害の方は、ずっと押入れで生活したという方もおられます。

高齢化しつつあり聴覚に障害をもつ人の生活の場としての老人ホームは、特有の見えにくい（＝わかりにくい）課題があるように思えるのです。受けた教育も一様でない。コミュニケーション手段も様々である。生まれつき障害のある方と途中で聞こえなくなった方はまた別の問題を抱えている事などです。これは、もしかすると、私に与えられたテーマかなと思っています。

